

真田紐は一般的に木綿糸を使用し、平たく織られた紐であり、名前の由来は天正（1573～93）の頃、真田昌幸が考案し、刀の柄を巻くのに用いたことから生じたとされる。児島の真田紐では材料は主として木綿、経糸は細く、緯糸は太く撚られ、幅は1～5 cm程度の堅縞のある袋織状の偏平な紐である。発生の時期は定かではないが、児島の気候温順な風土の中で浅瀬を干拓し、そこに棉を栽培・加工、機で紐が織られるようになったとされる。児島機業は、このような素朴な細巾織に由来するが、腿帯子（満州真田ともいわれ戦前、満州で使用）・袴司・厚司へと真田紐の細巾技術をもとにした児島独自の繊維産業を確立し、今日「繊維のまち児島」といわれるまでに発展した。しかし、現在、真田紐（箱紐として）を製造している会社は僅か2社にすぎず、真田紐自体は衰退の一途を辿った。

以上のような児島の真田紐の消長には、伝統服飾品が辿った経緯と共通するものがあり、泉大津の真田紐のように技術交替または革新によって消えていったのとは異なった、生活様式の変容と密接な関わりがあるのではないかと考え、両者の関わりを考察することにした。

児島の繊維産業の歴史を文献と現地での聞き取り調査の両側面から検討し、技法・デザイン（色・柄や形態）やその用途、販路などの現在までの推移と展開に着目することにより、真田紐をめぐる児島商人の態度や価値観のあり方を見出した。また、伝統服飾品としての真田紐の消長が生活様式の変容を具体的に示唆していることも指摘できた。このことは真田紐の造形性の限界と可能性に関わる問題でもあると考える。